今井 宏先生の御退任に際して

平 瀬 徹 也

今井 宏先生が本年3月末をもって東京女子大学を御定年で退職された。本学に専任講師として赴任された1958年から数えて41年間、その間の本学内外での先生の多彩な御活動を限られた紙数で紹介することは到底不可能であり、その詳細は他に譲って(『史論』第52集が今井 宏教授退職記念号となっている)、ここではその一端に触れるにすぎないことを最初にお断りしておかねばならない。

研究者としての今井先生の御専門は言うまでもなく、17世紀のイギリス革命を中心とするイギリス近代史である。大戦終了後未だ日も浅く、日本社会の民主化の完成が国民的課題と意識されていた当時、歴史学界においても近代の市民革命——とりわけイギリス、フランスの——への関心はきわめて高いものがあった。その意味では先生の御関心は時代の意識と密接に関わっていたが、当時のわが国の歴史学界の特殊事情として、近代社会成立史をもっぱら社会経済の変動から説明しようとする大塚久雄氏を中心とする社会経済史学が巨きな影響力をふるっていた。そうした状況下では先生の目ざしたような政治史的分析は事象の表面をなでまわす皮相な歴史、時代遅れの歴史学とみなす雰囲気すらあった。今日から見ればそうした一面的風潮こそが皮相であることは明らかであるが、「時代の趨勢」に弱い日本人の特性は学界といえども例外ではなかった。

そうした状況の下で今井先生が研究者として敢えて市民革命の政治過程の分析を最初の仕事として選ばれた理由を直接うかがったことはないので推測する他ないが、私はその理由をだれか特定の個人——例えば恩師——の影響といったものに帰するのは正しくないのではないかと想像している。思うに、実生活においても実に多様な分野に強い関心を寄せる先生にとって、歴史を単純な「基底還元論」で割りきることなく多面的に考察することは、ほとんど天性から来る要請であり、議論の余地のない当然のことと感じられたのではなかろうか。研究者の間に少なくないいわゆる「専門馬鹿」——私はこれが一概に悪いと言うつもりはないが——ほど先生のイメージから遠いものはなかろう。物事を綜合的に、また長期的視点で捉える必要を建前として否定するひとはいないであろうが、実際に専門研究の上でそれを生かしてきたひとは、イギリス近代史研究者の間でも先生の他に多いとも思われない。

以上に述べた先生の研究者としての姿勢は当然諸業績に反映する。先に私は先生の御専門がイギリス革命を中心としたイギリス近代史にあると記したが、狭い専門の枠にとらわれない先生の御関心はその後、数多いイギリス史関係の概説や入門書の編著

に、また国家の枠を越えた一時代の通史（例えば『絶対君主の時代』）に反映し、実を結んでいる。私自身、長年、先生と卒業論文の口述試験に同席し、その関心の多様さと知識の該博さを感じさせられてきた。その意味では、先生の関心がその後さらにイギリス史プロパーを越えて日英文化交流史に向かい、これを第２の専門とされたのは必然であったのであろう。

今井先生がこのように御自身の専門研究の枠を拡げて行かれる一方で、東京女子大学で役職を歴任されたことは記憶に新しいところである。その一端は前記の『史論』の退職記念号を参照されたいが、あくまで一端であり、たびたびの史学科主任はむろんのこと、大学資料室長など他にも力を注がれた役職は少なくない。だが、私が強調したいのは役職の数ではなく、そこでの先生の仕事ぶりである。先生にとっては、こうした場合によくある大過なく過ごすだけの役職就任は一つも無かったのではなかろうか。引受けるからには全力投球で抱負を実現しようとするのが先生の流儀であった(それだけに一部で煙たく思う向きもあったであろうが)。また、そうした場合、先生は実にアイデア豊かであった。その点は未だに私にも理由がよく分らないのであるが、先生の経歴は大学院満期退学から本学の専任教員といわば一直線である。戦後のこの時期に一家をなした研究者によくある他の職業に一時であれ従事していたといった廻り道が全くない。それなのに何処で何うしてあれだけの社会常識を身に付けられたのかと不思議に思うのは私ばかりではあるまい。これまた天性としか言いようがない。旺盛な知的好奇心の為せるわざであろうか。何しろ先生の関心は文学、音楽からスポーツまで実に多彩である。「巨人、大鵬、卵焼き」は子供の好物といった俗説に動ぜず、真のインテリは巨人ファンであると信じて疑わない。ラグビーやサッカーといった若者の好みに迎合しないところも先生らしい。

最後になってしまったが、今井先生が学生指導にとりわけ熱意を傾け学生間に人気があったことも特筆される。先生独特の機智に富んだ話しぶりも人気の理由であったろうが、何よりも学生のために労を惜しまれなかったことが大きかったであろう。それだけに真面目に努力しない学生には厳しい先生でもあったが、さすがに近年は、厳しさを優しさが上回ることが多かったようである。大学院でさらにイギリス史の勉強を続けたいと願う学生が毎年のように出たことも人気のバロメーターであったろう。

今後、東京女子大学史学科が他大学との競争の中でその存在意義を主張していかなければならないときに、今井先生の御退職は学科にとって損失であるが、個人的には自由になって為さりたい事も先生の御性格からして多いと思われる。健康と今後の一層の御活躍を願って止まない。